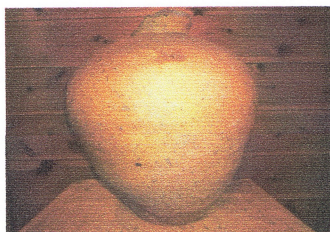


古信楽大壺（15世紀、高さ49.5cm、幅41cm）

日本六古窯のひとつである信楽焼に大きな転機が訪れたのは、それまで「唐物」と呼ばれていた中国伝来の茶道具からの脱却で、日本独自の「侘」「寂」「冷」「枯」といった自然観を基に、単なる喫茶から「茶道」として確立していく過程においてである。

今までは日常雑器としての役割しかなかった信楽焼や備前焼等を積極的に茶道具として取り入れ始めた。のみならず茶人自らの好みに合わせた道具作りも行い、禅の道にも通じる「冷え枯れた美」として、極めた者しか理解しえない高度な境地で信楽焼が茶道具のなかでも重要な位置を占めるようになっていった。掲載の大壺は15世紀、室町時代に作られた。全体に明るい橙色の素地で、口縁はゆるやかに外反し、そのまま折



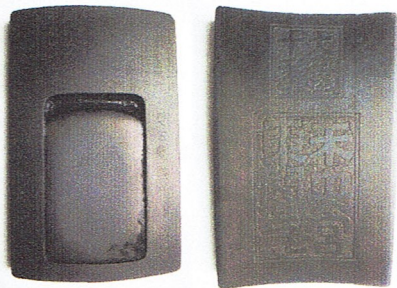
り返している。胴が大きく張った算盤型で、肩部全体にうつすらと灰がかぶり、全体に石ハゼ多く、所により火色もあり、写真ではこの壺の魅力が伝わらないのが残念だが、見飽きる事のない信楽大壺の名品と呼んでも差し支えないでしょう。元來このよ

うな大壺は穀物や種籾の貯蔵器として使われていた物だが、その冷え枯れた肌合いが初期の茶人達の目に留まり、やがて日本人独自の侘茶へと繋がっていく。唐物という千金の値の物と、庶民が使う日常雑器に同等の価値を与えてしまうなど、現在の茶

人には想像すら出来ないだろう。もとよりこの大壺が茶席の一座を占める事はないが、それでも500年以上を生き抜いてきた確かな存在感には畏敬の念さえ抱いてしまう。

未央宮東閣瓦硯 (20.5cm×13.5cm、高さ2.0cm)

東京の湯島天神下に筋の良い骨董品を扱う店があった。主人はこの業界では名の知れた人で、著書も多数あり、今でも時折この人が鑑定した骨董品の箱書きを見る事がある。残念な事に後継者の代で店を閉じてしまったが、その折、店名にもなっていたこの未央宮瓦を分けてもらった。本来は瓦なのだ、それに窪みをつけ墨が磨れるように硯として再生させた物で、いわゆる瓦硯と呼ばれている。全面には出土した場所や来歴、それを加工した人。また、この瓦硯を所有していた人が細かい文字で刻まれ、裏面には未央宮東閣瓦と大きく彫り込まれている。未央宮は前漢の皇帝高祖劉邦が中華統一後、高祖7年(紀元前200年)に造り始め、周囲全長約8800mでその中に前殿、清涼殿等、



様々な殿閣や武庫、大倉があったと伝えられている。清時代に描かれた未央宮の見取図の中に、それらを囲っている楼閣のひとつに東閣とある事から、

そこで使用されていた瓦の一部だと思われる。永遠に造り直すがないようにと、壮麗さと威厳を誇った未央宮も完成から200年を経て、時の反乱軍の手により焼失してしまった。夢の跡からこの瓦を拾い上げ、硯として再生させた文人や、未央宮を屋号にしていた骨董商はどんな夢を見ていたのだろうか。目の前の硯は黙して何も語らない。

安南象文様合子(16世紀、径7.0cm×高さ5.0cm)

ベトナムの首都ハノイ郊外。市街地から紅川を渡った所に焼物の村バッチャン窯がある。600年以上の歴史を誇り、良質の陶土と製品の運搬に適した地の利を活かし、今でもベトナム陶器の半数以上がこの地で作られている。掲載の合子も約400年前にここで作られ、どこかへ行く途中船が沈み、近年川底から引き揚げられた物。合子には様々な形や大きさ、絵文様があるが、その多くが鳥や草花文で、象が描かれた合子は極めて数が少ない。また、この手の合子は通常よりも大振りで、上質の呉須が使われている。象の図柄もいくつかあり、数人で象狩りをしている場面や、一人の人物が象を調教している様子を描いた物など、今まで8パターンの象合子を見つけたが、象単体という物は無く、必ず蓮の花と一緒に描かれていて、その背



景には風景図が多く、この合子にも二羽の鳥が遠景風に描かれている。十二支を思わせるような絵柄もあるし、この象や天女、魚といった絵もある事から、何かしらの目的を持った注文品として作られたのだろう。2000年10月。アメリカで行われたホイアン沈船のオークションや、当時中国磁器の代替品として盛んに輸出をしていた東南アジア方面からの出土品にも見いだせない事から、国内向けの商品として生産していたでしょう。欧米ではこうした合子を指輪やピアス等を入れる小物入れとして楽しまる人が多いようだが、日本ではお茶の香合として使われていて、その柔らかな器肌や色合いが茶人達に愛されている。様々な種類が数千点あると言われている合子。自分好みの物を見つけて生活の中に取り入れてみてはいかがでしょうか。



陶胎染付茶碗(1630~1650、径15.5cm×高さ6.3cm)

陶胎染付とはあまり聞き慣れない言葉だが、磁器の染付とは違い、陶器の土を使いその上に白化粧を掛け、その素地に直接呉須で文様を描いた後、透明釉を掛けて焼き上げた物。九州肥前磁器は1610年頃に誕生したとされ、それから間もない1630年頃にはこのような陶胎染付も完成している。初めから水指や茶碗といった茶道具が主体に作られていて、同時代の唐津焼等に見られる雑器の類は見当たらない。おそらくこれは藩の指導、庇護の下、大名や富裕層を対象にしていたからだろう。磁器と並行して作られているが、綺麗過ぎる磁器では当時の佻茶には適さず、あえてこのような技法を開発したと思われる。この茶碗の器胎は薄く高台内にも釉が掛かり、畳付は無釉で全体を陶胎の特徴でもあ



る貫入（ヒビ）に覆われている。そこに良質の呉須で梅竹が描かれていて、口縁は意識的な偶然なのか、正円ではなくやや歪んでいて自然な山道を作っている。呉須が胎に喰い込む程たっぷり使われていて、採算など度外視した贅沢な茶碗と言える。このような初期の陶胎染付は、作られた時期も数も限られている為、あまり市場には出る事が無い。伝世品の深い味わいと共に、口縁部には古い金直しが施され、それすらも剥がれ落ちる程良く使い込まれている。残念な事に手許に来た時にはバラバラに割れて、一部は欠損している。370年も大切に守られてきた物が一瞬の油断で壊れてしまったが、こうして割れても尚、大切に受け継いでいけばそれもまた、立派な伝世品となっていく事でしょう。

絵タイル(スペイン19世紀、20.9cm×20.5cm)

タイルの歴史は古く、紀元前2700年頃にはエジプトで作られていたとされ、強くて変色し難いことから主に建築用材として発展していくが、同時に室内装飾や外壁装飾としての美的側面も持ち合わせていて、今も世界中で広く用いられている。掲載の絵タイルはスペイン。アルハンブラ宮殿へ向かう広場近くの骨董店で手に入れた。イスラム的なアラベスタや草花文様とは違い馬に乗った人物が翼を広げたドラゴンに長い槍を持って戦っている絵柄で、ドラゴンもユーモラスなら人物もどこか牧歌的で戦闘といった緊張感は少しも感じられない。広場から坂を上がり昼間だというのに人通りは無く、2階建てのガッシリとした石造りの住居が両側に並ぶそのなかを、一人歩いているとスペインの強く明るい日差しとは対照的に、



何か言い知れない孤独感が沸き上がってくる。奥へ奥へと導かれるように歩いていると一軒、大きな扉が開いていた。内を覗くと骨董品らしい物が置かれ、店主が居たのであれこれと見せてもらいタイルを数枚買うと、他にも沢山あるからと別の屋敷に案内された。扉を開けると両壁面から中央の階段下までびっしりタイルで装飾されていて、好みの絵柄があれば剥がして売ってやると言われたのだが、どれも何十枚かで一つの絵になっていて、重量を考えるととも持って帰る気にはなれず諦めた。それなら2階から持って来てくれたのがこの絵タイルで、今まで見た事が無い物だったので購入した。ドン・キホーテに成りきれない、どこかほんわりしたこの絵タイルは春の陽射しこそがふさわしい。

黒高麗魚紋扁壺(17~18世紀、幅16.5cm、高さ21.5cm)

茶の湯を「道」として確立した千利休は後年、時の権力者である秀吉の好みに逆行するかのようにはびた茶道を追及していく。その最たるものが楽茶碗で、黒い器で茶を飲むという行為がいかに奇異に感じる。権力者であればあるほど華やかで贅を尽くしたものを好むが、現代においても黒い器を使うのは日本人くらしいだろう。ところで、当時隣国の李王朝では安価で大量生産が出来る様々な黒い器が作られていた。尤もそれらは一般大衆やそれ以下の人達が日常使う物で、権力者とは無縁であったが、当時交流のあった日本ではその他の雑器も含め、李朝の様々な焼物が茶人達に影響を与えたのは周知の事実で、利休の心の中にある何かがそうした焼物に刺激され、黒い器を生



み出したのではないだろうか。掲載の扁壺は17~18世紀頃、李朝後期に作られたが、日本では昔からこの手の焼物を黒高麗と呼び慣らされている。深めの皿を2つ合わせ、

小さな口の口と両肩に紐を通す為の耳が付く。高台は大きくがっしりとしていて安定感がある。この形は古くから西アジアや世界各地で作られていて、運搬に便利のように出来ている。分かり難いが胴部両側面には魚が線彫りされていて、その上から直接釉薬が掛けられ焼成されている。口も欠け、耳も欠けていて満身創痍という体だが、いかにも雑器然としていて肩肘張らない良さがある。こうした息の抜けるところが古の茶人達に受け入れられたのかもしれない。



焼締高足碗(1~2世紀、径11.8cm、高さ8.8cm)

オケオ遺跡は現在のベトナム南部メコンデルタ一帯に位置し、中国の歴史書のなかにある扶南国の事で、紀元1世紀頃に成立したとされている。東南アジア最古の王朝と考えられていて、当時の東南アジアの航海上重要な位置にあり、ローマの金貨や中国漢時代の鏡など、様々な人種や文化、交易品が集まる海港都市として7世紀まで栄えていた。掲載の高足碗はオケオ出土。一見すると日本の弥生式土器に似ているが、シャープなロクロ作りと、指で弾くとカンカンと音がする程堅く焼き締められている事が分かる。当時の用途は何だったのだろうか。ローマとの交易で得た地中海産のワインでも飲んだのだろうか。それとも



ヒンドゥー教を信奉していた統治者が、神々に供物を奉げる為に使用したのだろうか。日本ではこの種の遺物はほとんど流通していないので、知る人も少ないだろう。朱色とも橙色とも違い、強いて言えば曙色とも言うべき自然の色合いと、ローマの金属器から範を得たような端整な形。東西文化の融合が生み出したこの器は、浸水性はあるものの今も十分使用に耐えられる。約2千年前のこの高足碗に新年の祝い酒を入れて飲み干してみようか。あれこれ考えてみるのも骨董好きの楽しさでもあり、醍醐味ともいえるでしょう。

るのも骨董好きの楽しさでもあり、醍醐味ともいえるでしょう。本年も宜しくお願い致します。